

令和7年度(2025年度) 研究員派遣による学校支援に関する研究(特別支援教育)

中学校における「共に学ぶ」視点に立った授業づくり

－特別支援学級での構想から実践、省察を校内で共有する取組を通して－

内容の要約

本研究では、中学校における特別支援教育の充実を目的として、「共に学ぶ」視点に立った授業づくりを進めた。特別支援学級において、生徒理解を基に指導内容や指導方法を工夫し、その構想・実践・省察の過程を「授業づくりネット」に記録して校内で共有した。「授業づくりネット」は、生徒の姿を基に授業づくりを可視化し、閲覧した教員の気付きを授業者に返すことで授業改善に生かすことができ、授業公開や情報共有を通して教員間の協働を促した。さらに、特別支援学級で行ってきた生徒理解に基づく工夫を通常の学級にも生かすことで、個に応じた指導や支援が学級全体の学びやすい環境づくりにも有効に働き、生徒が「わかった」「できた」と実感できる学びの充実につながった。

キーワード

「共に学ぶ」視点
指導内容や指導方法の工夫
生徒理解
教員間の協働
「授業づくりネット」
学びの充実

目		次	
I	主題設定の理由	(1)	VI 研究の内容とその成果 (4)
II	研究の目標	(2)	1 研究協力校における実態と課題 (4)
III	研究の仮説	(2)	2 特別支援学級における指導の工夫を生かした授業づくりの実際 (5)
IV	研究についての基本的な考え方	(2)	3 「授業づくりネット」の活用とその効果 (7)
1	「共に学ぶ」視点に立った授業づくり	(2)	4 通常の学級における「共に学ぶ」視点に立った授業づくりの実際 (8)
2	構想から実践、省察を校内で共有する取組	(2)	5 指導者の変容 (10)
3	研究の成果と課題の分析について	(4)	VII 研究のまとめと今後の展望 (12)
V	研究の進め方	(4)	1 研究のまとめ (12)
1	研究の方法	(4)	2 今後の展望 (12)
2	研究の経過	(4)	文 献／付 録

「共に学ぶ」視点に立った授業づくり

一人一人の
学びの充実



通常の学級に活用

特別支援学級での構想から実践、省察を校内で共有

指導内容や
指導方法を
工夫する力



特別支援学級での授業づくり

生徒理解

生徒の姿を捉え
授業づくりにつなげる



特別支援学級の教員

- ・個別の教育支援計画や個別の指導計画から分析
- ・学習の様子

〇〇さんの
様子を教
えてほしい

視点の
共有

交流学級
では…



特別支援学級以外の教員

- ・交流及び共同学習の様子
- ・指導の専門性を生かした気付き

構想

生徒理解を基に、指導内容や指導方法に反映



〇〇さんが力を発揮で
きるための指導とは…

教材の活用方法は!?

特別支援学級の教員

- ・個別の指導計画の目標
- ・教科・単元のねらい

授業づくりの 過程を公開

授業づくりネット			
個別の指導計画より関連する目標	教科等のねらい、想定される場面		
教科学習の目標 または 共同学習の目標	授業を通して引き出したい力		
授業者の気付き			
ドキュメンテーション	授業者の気付きを記入		
生徒の姿	授業の構想	実践の様子	省察の整理
記録による気付き			
コメント	ドキュメンテーションを見た教員が気付きを記入		
気付き	問い	感想	

「授業づくりネット」の記録を閲覧

この工夫がいいな
自分の指導に役立
つかも

実践

個に応じた指導の
工夫を公開



視点の
共有

自分のできることを生かして
頑張っているな



特別支援学級以外の教員

- ・指導の工夫に着目した授業を参観

省察

参観者からの気付きを次の授業に生かす

なるほど!次の授業
の手がかりになる

視点の共有

課題の示し方に●●を
活用したらどうかな?

特別支援学級の教員

- ・ねらいの達成点
- ・成果と課題の振り返り

特別支援学級以外の教員

- ・指導の専門性を生かした気付きを授業者へ助言

研究員派遣による学校支援に関する研究(特別支援教育)

中学校における「共に学ぶ」視点に立った授業づくり

－特別支援学級での構想から実践、省察を校内で共有する取組を通して－

I 主 題 設 定 の 理 由

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」(中央教育審議会、令和3年1月)では、小・中学校における障害のある児童生徒の学びの充実のために、「特別支援学級と通常の学級の学級担任間や教科担任等との連携による指導体制を整備し、各教科等の学習を更に充実する必要がある」¹⁾と示されている。特別支援学級と通常の学級の児童生徒が共に学ぶ活動の充実の観点からは、教科学習について「児童生徒の障害の程度等を踏まえ、共同で実施することが可能なものについては、年間指導計画等に位置付けて、年間を通じて計画的に実施すること」¹⁾、「その際、可能な限り、両学級の教育内容の関連の確保を図る」¹⁾と示されている。特別支援学級と通常の学級の学級担任間が連携して個々の学びを支援する体制や、多様な生徒が互いに学び合える環境を構築することが求められている。

「滋賀のめざす特別支援教育ビジョン(基本ビジョン)」(滋賀県教育委員会、平成27年3月)(以下、基本ビジョンという。)では、特別支援教育の基本理念を達成するための中心の柱として「共に学ぶ」を挙げるとともに、それを支える柱として「教員の資質能力向上」が挙げられている。教員の資質能力向上に関わっては「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告」(文部科学省、令和3年1月)でも、資質能力として「障害の特性等に関する理解と指導方法を工夫できる力や、個別の教育支援計画・個別の指導計画などの特別支援教育に関する基礎的な知識、合理的配慮に対する理解等」²⁾が必要であると述べられている。特別支援学級において授業づくりを行う中でこのような資質能力を向上させることができれば、共に学ぶ場となる交流及び共同学習や通常の学級での指導についても、同報告の「多様な教育的ニーズのある子供がいることを前提とした学級経営・授業づくりに生かしていくこと」²⁾につながると考える。

また、「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告」(文部科学省、令和4年3月)では、「全ての教師に求められる基本的な資質能力として、特別支援教育を重要な柱として明確に位置付ける必要がある」³⁾と示されており、全ての教師に対し特別支援教育の知見や経験を蓄積するための組織的対応と具体的方向性が述べられている。さらに、「新規採用から長時間経過していない期間において、多くの教師が障害のある児童生徒の学びの特性を理解し、特別の教育課程に基づく個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成に携わりながら、学習指導案を作成し、年間を通じて実際に指導に当たる機会を設けることが不可欠」³⁾としている。その機会が教員にとって資質能力を高める経験となるためには「当該教師の学びを支えるための仕組みや環境を整えることが不可欠」³⁾と示されているように、手立てが必要である。

本研究では、中学校における特別支援教育に関わる学びを支える取組として、校内の関係教員が協働して特別支援学級の生徒理解を進め、指導内容や指導方法を工夫した授業を構想し、実践する。実践後には、生徒の姿を基に省察し、次の授業を構想する。この一連の過程を校内に公開し、共有することで、教員の個に応じた指導内容や指導方法を工夫する力につなげる。さらに、特別支援学級での授業づくりから得られた手がかりを通常の学級にも生かすことで、「共に学ぶ」視点に立った授業づくりを校内に広げることを目指す。こうした取組の広がりが、生徒が「わかった」「できた」と実感できる、充実した学びに結び付くと考え、本主題を設定した。

Ⅱ 研究の目標

特別支援学級での授業づくりの過程を校内で公開し、授業での指導内容や指導方法の工夫が教員間で共有され、通常の学級にも生かすことで、「共に学ぶ」視点に立った授業づくりを目指す。

Ⅲ 研究の仮説

校内の関係教員が協働して特別支援学級の生徒理解を進め、授業を構想し、実践、省察を繰り返す。この過程を公開し、校内の教員と共有することで、指導内容や指導方法を工夫する力につなげる。さらに、こうした取組を通常の学級にも生かすことで、「共に学ぶ」視点に立った授業づくりが広がり、生徒の学びの充実につながるだろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 「共に学ぶ」視点に立った授業づくり

基本ビジョンでは「共に学ぶ」ことについて、「それぞれの子どもにとって授業内容が分かり、学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら充実した時間を過ごすことができるなど、障害のある子どもが十分な教育を受けられることを前提に、障害のある子どもと障害のない子どもが同じ場で共に学ぶことをめざす」⁴⁾としている。この「共に学ぶ」という柱を支える観点の一つとして「教員の資質能力向上」(図1)が挙げられている。「障害のある子どもの障害の状態や教育的ニーズに応じたきめ細かな指導が行えるよう、教員の資質能力の向上を図る」⁴⁾とし、「障害のある子どもと障害のない子どもがお互いのよさを学び合う教育活動が展開できるよう、教員の特別支援教育に係る専門性の向上を図る」⁴⁾と示されている。

実際に、特別支援学級の生徒は特別支援学級で学ぶだけでなく、交流及び共同学習として通常の学級で教科等の学習を行っており、通常の学級の教員は、生徒一人一人の教育的ニーズに対応するために、特別支援学級での指導内容や指導方法を積極的に活用し、授業づくりを行う必要がある。「障害理解や障害特性に合わせた指導など、特別支援教育に対する理解と特別な支援を必要とする児童生徒への指導力を向上」⁴⁾させ、資質を高めていくことで、「共に学ぶ」視点に立った授業づくりが校内に広がり、生徒の学びの充実につながると考える。

2 構想から実践、省察を校内で共有する取組

(1) 校内の関係教員が協働して進める特別支援学級の生徒理解と情報共有

特別支援学級の担任や特別支援学級における教科指導者は、特別支援学級の生徒について生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、個に応じた指導・支援を行うための情報を共有する。その際、個別の教育支援計画や個別の指導計画を参照しながら生徒の強みや困難さを分析する。生徒理解のために、中学校教員の教科指導や生徒指導の専門性を生かした気付きを加え、多面的に生徒の姿を捉える。こうした視点に基づく生徒理解の情報を校内の関係教員間で共有し、授業づくりに反映させる。



図1 基本ビジョンの構成イメージ(滋賀県教育委員会「滋賀のめざす特別支援教育ビジョン(基本ビジョン)」より一部抜粋)

(2) 校内の教員に公開する授業づくり

生徒理解を基に、研究始期は研究員が研究協力員と協働して授業を構想し実践する。まず、研究員は特別支援学級の担任や特別支援学級における教科指導者から、改善したい授業について聞き取り、個別の指導計画における目標や、その教科および単元等のねらいで達成させたいことを共有する。構想は校内の関係教員と確認し、実践する。この実践を生徒の実態等に配慮しつつ校内の教員が参観できるようにする。参観者は、生徒理解を基に工夫された指導に着目しながら参観を行い、実践後、授業について協働して省察する。ねらいが達成されたかどうかだけでなく、参観者は中学校教員の教科指導や生徒指導の専門性を生かした気付きを基に、それぞれの視点から省察を行う。

研究終期に向けては、省察した内容を踏まえ、特別支援学級での授業づくりで得られた手ごたから、指導内容や指導方法を工夫し、通常の学級における授業づくりを行う。

このように、うまくいかなかったことや想定していなかったことも含め、授業づくりに関する様々な気付きを基に改善していく過程を校内で公開し、教員の工夫する力の向上につなげる。

(3) 構想から実践、省察の過程を共有するための「授業づくりネット」の活用

授業づくりの過程を学校全体で共有し、校内の教員が協働して授業づくりを行うため、「授業づくりネット」を作成する。この「授業づくりネット」は、当センターの令和6年度研究員派遣による学校支援に関する研究(特別支援教育)の成果物である「情報共有ノート」を一部改編したものである。「授業づくりネット」の活用を通して、構想から実践、省察の過程を校内で共有する。

「授業づくりネット」の項目と活用の流れを図2に示す。まず、個別の指導計画や教科等のねらい、想定される場面を基に教科学習の目標を設定し、授業の中で引き出したい力を記載する。交流学級における教科学習では、共同学習の目標を設定する。授業者は、授業づくりにおける生徒の姿、授業の構想、実践の様子、省察したことを整理して記録する。記録には「ドキュメンテーション¹⁾」の手法を用い、閲覧した校内の教員にと

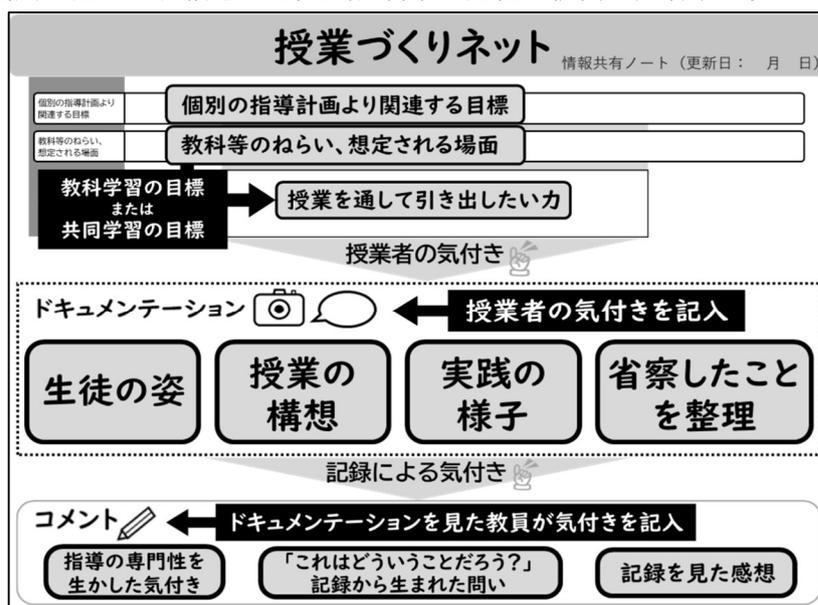


図2 「授業づくりネット」

っても効果的な情報となるようにする。「授業づくりネット」に記録されている内容を基に、校内の教員は、指導の専門性を生かした気付き、「これはどういうことだろう」といった問い、感想などを「コメント」に追記する。そして、それらを生徒理解や自身の指導の工夫にも生かしていく。

このように、授業者と校内の教員がそれぞれの気付きを重ねることで、授業者は「授業づくりネット」の中で得た気付きを次の授業構想につなげる。構想から実践、省察の過程を共有することにより、特別支援学級の授業づくりから得た手ごたを通常の学級での授業づくりにも生かし、「共に学ぶ」視点に立った授業づくりを校内に広げていくことを目指す。

¹⁾ 保育記録の手法である「保育ドキュメンテーション」を参考にした、写真等を用いた記録のこと。

3 研究の成果と課題の分析について

本研究の取組を、特別支援学級や通常の学級において教員の指導内容や指導方法を工夫する力の向上につなげることができたか、またそれにより生徒に変容があったかを検証する。教員については指導者質問紙調査を通して意識の変容を見取る。生徒については授業における姿を複数の教員が指導の工夫の前後で観察する。これらを総合的に判断して研究の成果を検証する。

V 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 研究協力校において派遣研究説明会を実施し、研究協力校の全ての指導者に研究の概要や計画の説明を行う。
- (2) 研究協力校において、これまでの特別支援学級の授業づくりや、指導者の意識等についての質問紙調査から各校の実態や課題を把握し、本研究の目標に沿って学校支援の内容を設定する。
- (3) 生徒や各校の実態を踏まえ、指導者との協議を通して、対象とする授業を設定し、校内で協働して授業づくりを行う。
- (4) 指導内容や指導方法の工夫を明確にしたうえで、指導者と共に特別支援学級および通常の学級における生徒の姿について省察し、生徒の変容を分析する。
- (5) 研究協力校において年間2回の派遣研究協議会を実施し、各校での取組について交流・協議する。
- (6) 研究協力校での取組内容、成果と課題についてまとめる。

2 研究の経過

4月～11月	派遣研究(中学校2校、各校週1回派遣)	夏季休業中	2学期に向けた授業づくり
5月	派遣研究説明会	10月～11月	指導者質問紙調査(終期)の実施と分析
6～7月	指導者質問紙調査(始期)の実施と分析	11月～12月	第2回派遣研究協議会
8月	第1回派遣研究協議会	2月	研究発表大会

VI 研究の内容とその成果

1 研究協力校における実態と課題

研究始期に、2校の研究協力校の教員を対象に特別支援教育に関する質問紙調査を実施した。

特別支援学級で教科指導等を行う教員を対象にした「特別支援学級での指導の工夫を通常の学級でも生かすことがある」という設問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的に回答した教員は80%であった(図3)。生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、個に応じた指導・支援が、通常の学級においても有効であると多くの教員が認識していることを示している。

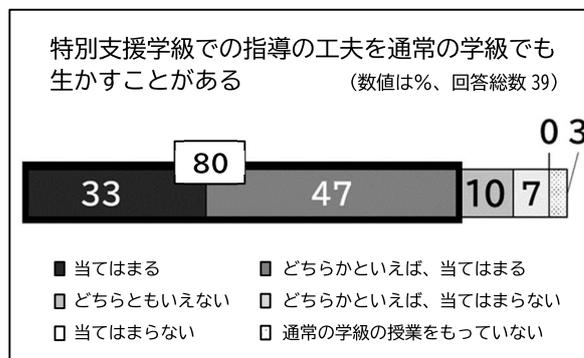


図3 指導の工夫について

一方で、特別支援教育専門性尺度⁵⁾の項目を一部用いた調査(図4)は、特別支援教育の専門的な指導や実践、教材に関する設問において、肯定的に評価した教員は半分に満たなかった。「特別支援学

級における授業づくり・指導内容や指導方法の工夫について、知りたいことや困っていること」として記述された内容からも、特別支援教育に関する授業づくりや指導の工夫に対して悩みを抱える教員が一定数存在することが見受けられた(図5)。

これらの質問紙調査の結果から、特別支援学級で教科指導等を行う教員の多くは、障害のある生徒へのきめ細かな指導の必要性を認識しているものの、障害の特性に応じた教材作成といった特別支援教育に関する専門性や指導力について不安があることが推察された。

そこで、特別支援学級の担任が中心となり、校内の関係教員と協働しながら、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教材選定や指導に基づいた授業づくりを実践した。この実践の様子を公開したり、「授業づくりネット」を活用したりしながら、授業づくりの過程を教員間で共有することで、具体的な指導内容や指導方法の工夫、生徒の学びの姿を知る機会となり、各教員が自身の指導の工夫に生かすことにつながると考え、取組を進めた。

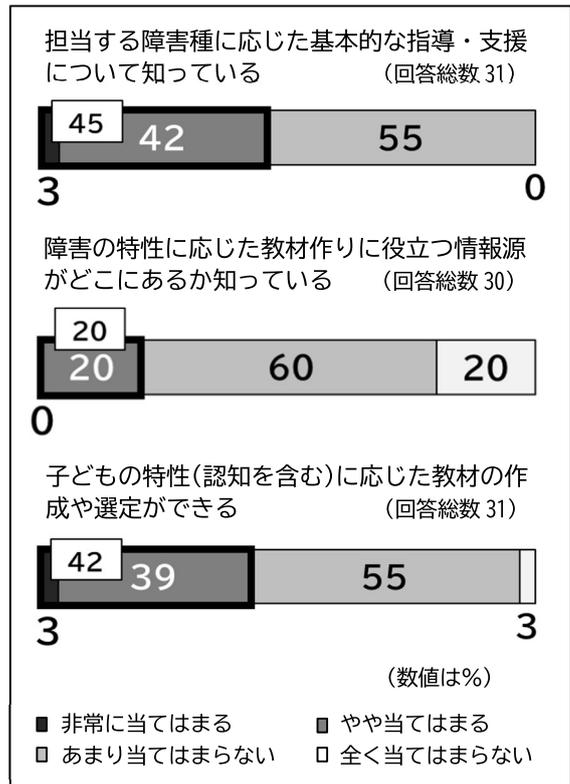


図4 特別支援教育の専門性について

特別支援学級における授業づくり・指導内容や指導方法の工夫について、知りたいことや困っていること

- ・全てがはじめてで何からすべきか迷うことがある。
- ・生徒にどのような力を付けることが必要か、生徒の将来に生きて働く学力とはどのようなものか。
- ・決まった教科書がないので、今やっていることが正しいのかどうか分からない。
- ・特別支援学級の授業の教材についてどのようなものがあるか。
- ・一人一人の課題に合わせながら、全体指導をどのように進めていくか。
- ・目標設定をどの程度にするか、生徒間の差を指導の中でどう調整するか。

図5 指導者質問紙調査(始期)の記述(一部)

2 特別支援学級における指導の工夫を生かした授業づくりの実際

(1) 生徒理解に基づく指導の工夫

Y校の自閉症・情緒障害学級に在籍する生徒aは、学習に対して意欲的な面もあるが、集中力が続かないという実態がある。これ

個別の指導計画より関連する目標	・授業中に指導者の言葉かけに反応し、学習活動に意識を向けることができる ・問題や指示を理解し、一人で課題に取り組むことができる
教科等のねらい、想定される場面	一次関数の式をみて、グラフをかくことができる →発表するなど意欲的な面もあるが、集中が途切れてしまうことがある
教科学習の目標	特別支援学級の学習でしていること、引き出したい力 ・学習の流れや自分がすることを見通して取り組む力 ・自分の力で問題に挑戦しようとする力 ・自分で気持ちや注意を切り替え、学習に戻ろうとする力

図6 生徒aの教科学習の目標「授業づくりネット」より(一部)

は、個別の指導計画でも共有されている(図6)。

こうした実態を踏まえ、数学科の教科指導者Aは、生徒aが力を発揮し、学習に意識を向け続けることができるよう、見通しがもてるような提示や環境の調整など、個に応じた指導の工夫として、「①プリントの活用」「②大型モニターの活用」「③注意の促し」「④学習課題の手順」を軸に支援を進めた(表1)。

まず、学習課題を焦点化し取り組みやすくするために、問題の精選と、書き込みスペースが広く

確保されたプリントを活用した。また見通しをもちやすくするために大型モニターを活用し、授業の流れを視覚的に提示したり、解き方の手順を段階的に示したりした(図7)。

集中の持続と学習への意識付けについては、説明と板書の時間を分け、端的な言葉かけで生徒の注意を促し、取組への意識

を維持できるように工夫した。そして、生徒aが自分で考えて取り組めるように、まず例題を指導者と一緒に解くことで手順を確認し、学習課題に取

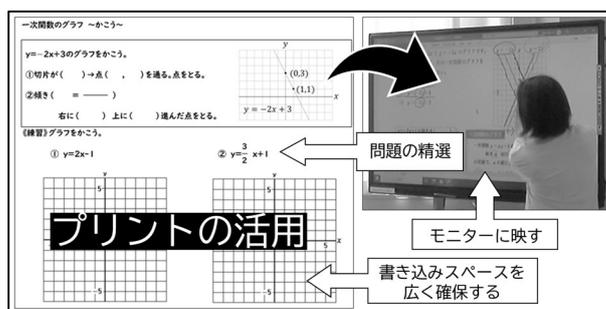


図7 プリントと大型モニターの活用の様子(枠内は筆者)



図8 個別支援の様子(囲みは筆者)

り組む際は、解き方の手がかりを示すなど、個別支援を充実させた(図8)。

こうした指導の工夫の結果、生徒aは一次関数のグラフの問題において、手がかりを基に式から切片や傾きを読み取り、座標を求めることができた。解き方が分かると、次の問題にも意欲的に取り組もうとする姿が見られた。

このことから、生徒理解を基に教科学習で引き出したい力を具体的に設定した(図6)ことで、生徒aに対する支援の内容が明確になり、目指す姿に近付けるような個に応じた指導の工夫につながったと考えられる。

(2) 教員の気づきにつながる公開授業を通した指導の工夫の共有

Z校の知的障害学級では、1学期の生活単元学習において、合唱コンクールの振り返り発表会に向けた活動を実施した。生徒が仲間と協力して取り組んだ経験を振り返り、自分の頑張りや達成感を言葉で伝える力を育むことを目的とした。

知的障害学級の実態として、自分の考えや思いを言語化して表現することに苦手意識をもつ生徒が多く、交流及び共同学習における発表活動では、緊張や不安から十分に話すことができなかった経験がある。また、書字が苦手な生徒がいるため、発表原稿の作成では抵抗感を示す可能性があると考えた。

こうした実態を踏まえ、担任である指導者Bは、生徒が安心して発表活動に臨めるよう、環境づくりと心理的安全性への配慮を重視した指導の工夫を行うこととし、「①ICTの活用」「②発表内容の明確化」「③段階的な練習」を軸に支援を進めた(表2)。

表2 合唱コンクールの振り返り発表会における指導の工夫

指導の工夫	具体的な支援の内容
①ICTの活用	<ul style="list-style-type: none"> ・1人1台端末でスライドを作成 ・発表原稿はスライドのノート欄に入力
②発表内容の明確化	<ul style="list-style-type: none"> ・スライド枚数を5枚に統一 ・スライドの枠組み(見本)の提示
③段階的な練習	<ul style="list-style-type: none"> ・個別練習(指導者と原稿読み) ・少人数練習(クラスメイトに発表) ・全体練習(リハーサル)

まず、書字が苦手な生徒が自分の力で発表原稿を作成できるよう1人1台端末を利用してスライドを作成した(図9)。また、自分の考えを言語化して表現することに苦手意識をもつ生徒が内容を整理しやすいように、スライド枚数を5枚に統一し、見通しをもって取り組むための枠組みの提示

を行った。さらに、発表活動への緊張や不安を軽減するため、個別練習、少人数練習、全体練習を実施し、発表場面に慣れることで、本番に前向きに臨めるように配慮した。

リハーサルは、交流学級担任の指導者Cを招き、本番に近い形で実施した(図10)。指導者Cから「堂々と発表していた」と褒められたことで、生徒たちの「できた」という自信につながった。本番では、どの生徒も落ち着いて発表することができ、参観した教員から「とてもよい発表で、たくさんの人に聞かせてあげたい」と言葉をかけられ、生徒たちは嬉しそうな表情を見せ、達成感を得たことがうかがえた。

〈1〉合唱曲の紹介

タイトル 「変わらないもの」

<どんな曲か>
「遠く 遠く」 「ずっとずっと」 「一年先も十年先も」 など繰り返す言葉で力強い意志が感じられる曲です。

美しいメロディーの中に、「寂しさ」と「前向きさ」が込められています。



図9 生徒が作成したスライド(一例)



図10 リハーサルの様子(枠内と吹き出しは筆者)

公開授業では、指導者Bの指導の工夫や生徒の学びの姿を校内の教員と共有することができた。その中で、指導者Cは「交流学級の発表場面では、緊張して話が途切れてしまうこともあったが、十分に準備をして発表に臨むことがとても大切だと感じた」と振り返っている。

特別支援学級での授業を校内に公開することにより、参観した指導者の間で、生徒の実態に応じた指導の工夫やその効果が共有され、生徒理解を深めることができたと考えられる。

3 「授業づくりネット」の活用とその効果

(1) 「授業づくりネット」を用いた授業記録の共有

乙校では、特別支援学級での「合唱コンクールの振り返り発表会」の様子や指導者の気づきを「ドキュメンテーション」の方法で記録し、「授業づくりネット」を活用して校内に公開した。これを見た教員からは、生徒の努力や学びの積み重ねが伝わったとの気づきが寄せられ、「取組の定着」や「ポートフォリオ作成への発展」を期待するコメントがフィードバックされた。指導者は、「指導の成果や改善点が分かった」「自分の授業を客観的に振り返ることができた」など、次の授業構想を考えるうえでの手がかりを得た。さらに、校内の教員にとっても、生徒理解を深め、特別支援学級における授業づくりに触れることを通して、自らの指導内容や指導方法について見直す機会となったと考えられる(図11)。

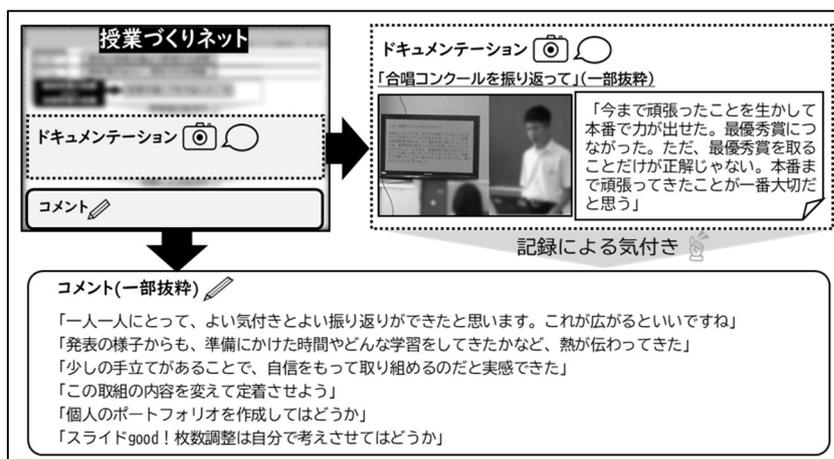


図11 「授業づくりネット」の活用例

(2) 「授業づくりネット」が校内の教員の授業づくりにもたらした変化

指導者質問紙調査から、「『授業づくりネット』を閲覧することで授業づくりに役立ったこと」の設問において、多くの教員から「他教員の実践から教材や指導方法のヒントを得た」「自身の指導の工夫に生かすことができた」と回答があった。さらに、他の回答からも、教員間で授業づくりや生徒について意見を交わす場が生まれ、協働の広がりが確認された(表3)。始期の回答では、教材の選定方法に悩む声がみられたが、終期の回答では、授業実践の共有が、そのような悩みの軽減につながっている可能性が示された。また、記述からは、指示の出し方など、「授業づくりネット」から得た情報を指導方法の工夫に役立てている様子が見えてきた(図12)。

このことから、「授業づくりネット」の活用により、授業づくりの過程を「見える化」し、具体的な実践を共有することは、校内の教員の気付きや指導の工夫を促すうえで有効であったと考えられる。

表3 「授業づくりネット」の効果について

「授業づくりネット」を閲覧することで、授業づくりに役立ったと感じることはありましたか(複数選択可)(回答総数:39)	
生徒理解を深めることができた	10
他教員の実践から教材や指導方法のヒントを得た	25
自身の指導の工夫に生かすことができた	14
教員間で授業や生徒に関する対話や共有が生まれた	9
特に役立ったとは感じていない	0

- ・ 困り感をもっている生徒への配慮、支援。
- ・ 生徒の立場に立って選んだ言葉かけ。
- ・ 発問の出し方。
- ・ 生活単元学習や作業学習で行っている内容を知ることで、授業の中でその話題を取り入れたり、連動させた内容の学習を行ったりすることができた。
- ・ 分かりやすい明確な指示を出したり、事前に取り組み内容や方法を伝えたりすることを意識した。

図12 「授業づくりネット」を閲覧することで授業づくりに生かされた場面の記述(一部)

4 通常の学級における「共に学ぶ」視点に立った授業づくりの実践

特別支援学級で積み上げてきた生徒理解に基づく指導の工夫と、その過程を共有する取組は、通常の学級の授業づくりにおいても生かすことができると考える。そこで、特別支援学級の担任がこれまでの取組を踏まえて、通常の学級でも個に応じた指導を実践し、その取組を校内で共有することで、「共に学ぶ」視点を広げていけるよう取組を進めた。

(1) 生徒の学びを支える指導の工夫

ア 特別支援学級の個に応じた指導の工夫を生かした取組

Y校の交流及び共同学習で家庭科を担当する指導者Dは、これまで家庭科では生徒aに大きな困り感が見られないと捉えていた。しかし、1学期に特別支援学級での数学科の公開授業を参観した際、生徒aの集中が途切れる場面があることや、数学科の指導者Aが注意を促しながら支援をしている様子を見て、教科によって学習の様子が異なることに気付いた。そして、この気付きが、交流及び共同学習における支援のあり方を見直すきっかけとなった。

家庭科では、生徒aは静かにしているように見える一方で、時折活動が止まる様子から、困り感を自分から表出しにくいことが分かった。そこで指導者Dは、安心して学習に取り組み、自ら活動を進めることができるよう、「①個に応じた支援」を指導の工夫として行うこととした(表4①)。

指導者Dは、生徒aの動きや表情に目を配りながら授業を進めた。活動が止まった時はそばへ行き、端的な言葉で活動内容を

表4 通常の学級での家庭科における指導の工夫

指導の工夫	具体的な支援の内容
①個に応じた支援	・ 端的な言葉かけによる活動内容の指示 ・ 取組方法の手がかりを複数提示
②「見て分かる」支援	・ 学習の流れや位置の明示 ・ イラストや写真入りの手順書の提示



図13 生徒aの学習の様子(困みと枠内と吹き出しは筆者)

伝えることを意識した。その結果、調べ学習では、指導者Dが示した幾つかの手がかりの中から調べる内容を選択するなど、自分から学習を進める姿が増えた(図13)。

また、生徒aに向けて行っていた言葉かけや進捗の確認は、通常の学級の生徒にも有効であった。授業中に集中が途切れると姿勢の保持が不安定になる生徒に、「今はここをやっているよ」などの言葉かけをしていくと、自分で姿勢を整え直し、学習に集中し直すことができた。この生徒aに行った支援が他の生徒の学びも支えていることを実感した。

このことから、指導者Dは表に出にくい困り感を汲みとり、生徒の様子やつぶやきを手がかりに、個々の力を引き出す働きかけをより意識して実践するようになった。

イ 学級全体の学びを支える「見て分かる」支援

指導者Dは、授業への見通しをもつ工夫として、特別支援学級で実践してきた「②『見て分かる』支援」を家庭科の全体指導にも取り入れた(表4②)。今学習

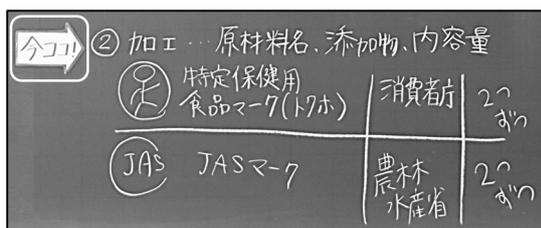


図14 注目(取組)箇所を矢印で示す例(囲みは筆者)

している箇所を矢印で示し、「今はここ」と視覚的に示すことで、生徒たちは自分で学習の位置を確認しやすくなった(図14)。調理実習では、イラスト入りの調理手順や片付け完了後の写真を掲示し、生徒がそれを見ながら片付けの作業を進められるようにした(図15)。その結果、今やることを自分で確認しながら主体的に取り組める生徒が増えた。



図15 見本を基に片付けを行った例(枠内は筆者)

指導者Dは、「誰かに行う支援は、他の誰かにも役立つ」と振り返り、生徒aへの支援が、通常の学級の生徒に対しても授業の見通しや集中のしやすさにつながることを確認した。

このように、特別支援学級での生徒理解に基づいた個に応じた言葉かけや「見て分かる」支援は通常の学級でも有効であり、学級全体の生徒の学びを支える手立てとなった。

ウ 指導の工夫から見えた生徒の変化

生徒aは、1学期の調理実習では自分の役割以外の時間に休憩している様子が見られたが、今回の実習では、指導者Dが実習前に頑張ることを一緒に確認したり、「見て分かる」支援を行ったりしたことで、実習後に「自分のできることを最大限のことができてよかったです」と振り返り(図16)、「今回は前回よりやることを分かって取り組めた」と述べた。

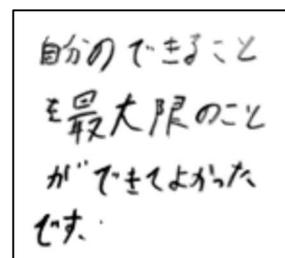


図16 生徒aの振り返りより(一部)

指導の工夫により、生徒aが見通しをもって活動することができ、達成感につなげることができた。

(2) 生徒の学ぶ意欲を高める、特別支援教育の視点を生かした取組

Z校の自閉症・情緒障害学級の担任である指導者Eは、これまで行ってきた個に応じた指導や、全ての生徒が安心して学びに向かうための工夫を通常の学級の国語科の授業にも生かした。

通常の学級では、多くの生徒が積極的に学ぼうとする一方で、学習への気持ちの切り替えに時間を要する生徒もいた。そこで指導者Eは、生徒が落ち着いて学習に取り組めるよう、授業の流れに見通しをもたせながら段階的に活動を構成する工夫を行い、「①授業冒頭の5分間の『学習タイム』」「②めあてを『見える化』したプリントの活用」「③段階的な朗読練習」「④ICTの活用」を軸に支援を進めた(表5)。

まず、毎時間の授業冒頭に5分間の「学習タイム」を設け、ワークや漢字練習に個別に取り組む時間として学習への気持ちの切り替えを促した。学習準備が整っていない生徒に対しては、その時間を活用し、「教科書を出してね」「ワークは〇〇ページを開こう」などと端的に伝えながら準備を共に行ったり、取り組む箇所を具体的に示したりして、学級全体が落ち着いて学習に向かえるよう支援した。

表5 通常の学級での朗読活動における指導の工夫

指導の工夫	具体的な支援の内容
①授業冒頭の5分間の「学習タイム」	・個に応じた言葉かけ
②めあてを「見える化」したプリントの活用	・学習のめあてと手順が見通せるよう4項目に整理し提示
③段階的な朗読練習	・個人練習(自分のペースで朗読練習) ・ペア練習(互いの朗読を聞き合い、良さを伝え合う) ・全体発表
④ICTの活用	・1人1台端末による朗読の録音

古典の朗読では、「工夫したいセリフ」「そう考えた理由」「練習して気付いたこと」「次に工夫したいこと」の四つのポイントを整理できるプリントを用意し、学習の目的と手順を明確にした。普段はプリントに取り組むづらい生徒も、指導者Eから練習中に大きな声で朗読する姿を褒められたことで意欲が向上し、指導者Eとのやり取りを通して「第3場面のこのセリフを力強く言いたい」など、工夫したいポイントを記入することができた。工夫したいセリフを選んで書くことで、登場人物の気持ちを考えながら自分なりの読み方を工夫しようとするなど、教科の目標に近づく姿が見られた。

朗読練習では、特別支援学級での指導の工夫と同様に、個人練習、ペア練習、全体発表へと活動を段階的に進めた。ペア練習では、友達と朗読を聞き合い、よかったところを伝え合う活動を行った。生徒はセリフの部分を一緒に練習したり、1人1台端末で朗読を録音し合ったりすることで、互いの工夫を意識するようになった。また、自分の朗読を録音して聞き返すことで、「思っていたより速くて聞き取りにくかった」「声の強弱がついていなかった」などの気づきが生まれ、生徒たちはプリントに「句読点でしっかり区切って読みたい」「息遣いを工夫して気持ちを表したい」といった、次に工夫したい改善点を書き加えていた。ICTの活用は、朗読を工夫しようとする学級全体の前向きな姿勢を引き出す手立てとなった。

また、指導者Eは「生徒一人一人が安心して学べる授業になるよう表情や進度を丁寧に見取りながら指導を行うことで、どのように進めると分かりやすいかを考える場面が増えた」と振り返っている。

このように、特別支援教育の視点を生かした授業づくりは、授業の流れに見通しをもたせながら段階的に活動を進める工夫や、個に応じた言葉かけなどの支援を組み合わせることで、生徒一人一人の学びの充実につながったと考えられる。

5 指導者の変容

(1) 「教材の作成や活用」に着目した指導者の意識の変容

特別支援学級で指導を行う教員を対象に、特別支援教育専門性尺度を用いて6月(始期)と11月(終期)に質問紙調査を実施し、授業づくりとの関連が大きい「教材の作成や活用」について、意識の変容を分析した¹⁾。始期の得点を基準に、平均値より低い教員を低群、平均値より高い教員を高群として2群に分け、始期と終期の得点を比較した結果、終期には低群で得点の有意な上昇が、高群で有意な低下が見られた(詳細は付録)。

この結果から、低群では、他の教員の実践や教材のアイデアに触れる機会が増え、「教材の作成

¹⁾分析は、清水裕士氏が開発した統計分析ソフトHAD⁶⁾を利用した。「非常に当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」という回答を、それぞれ4点、3点、2点、1点と得点化する。そして、項目ごとの得点を合計し、そこから算出した平均得点を心理尺度の得点とする。なお、「教材の作成や活用」は項目数を削減して実施した。

や活用」に対する実践への意識が高まったと考えられる。一方、高群では、特別支援教育への意識が高く、日頃から多様な工夫を行っていたため、研究の過程で自らの授業づくりをより高い水準から振り返るようになり、その結果「教材の作成や活用」の得点が相対的に低く表れた可能性がある。

(2) 特別支援教育の視点を生かした授業づくりに関する指導者の意識の変容

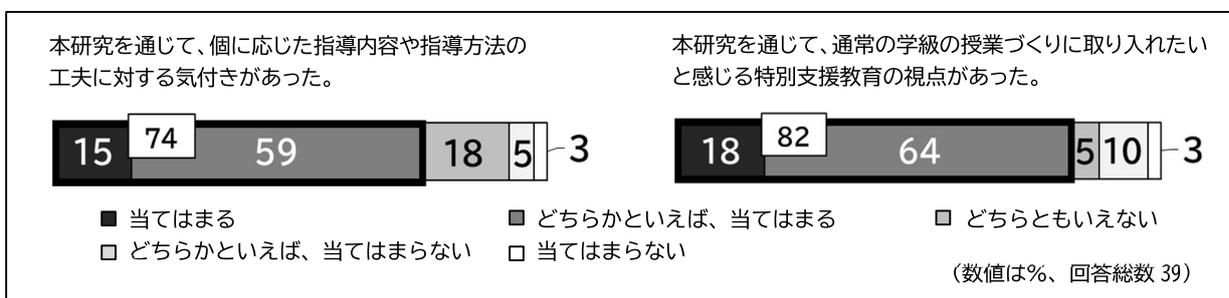


図17 指導者質問紙調査(終期)の結果(一部)

終期の指導者質問紙調査の結果から、本研究を通じて「個に応じた指導内容や指導方法の工夫に対する気付きがあった」「通常の学級の授業づくりに取り入れたいと感じる特別支援教育の視点がかった」といった項目では、多くの教員が肯定的に回答しており、こうした視点が通常の学級の授業づくりにも有効であると実感していることが明らかとなった(図17)。

(3) 「共に学ぶ」視点に立った授業づくりの今後の展開

派遣研究協議会では、特別支援学級の指導の工夫を生かした通常の学級での授業づくりについて校内で実践を公開し、その取組を踏まえて「共に学ぶ」視点に立った授業づくりに向け、今後大切にしていきたい指導の工夫について協議を行った。

協議では、実践を共有することで個に応じた指導の工夫が全ての生徒にとって分かりやすい授業づくりに生かせること、また他教科の実践からも自教科に活用できる多くのアイデアが得られることなどが話し合われた。振り返りからは、「共に学ぶ」視点を通常の学級に広げ、個に応じた指導やユニバーサルデザインの発想を踏まえた授業を構想しようとする意識が高まっていることがうかがえた(図18)。

- ・どの生徒でも分かる指示やワークシート、発問を工夫したい。
- ・ICTの活用(モデル動画を撮り、見て、気付く、アドバイス)。
- ・机上整理や開始5分の自主学習等、休み時間とのメリハリをつけ、まず生徒が学びに向かいやすい環境を整える。
- ・声に出さない生徒=理解できている生徒とは限らない。困ったことを声に出せるようにする指導も大切だが、教員側が生徒の様子を見て個に応じた必要な支援や対応を行う。
- ・生徒たちが何を手がかりに学習につなげているのか、それをよく考えて授業を組み立てる。
- ・「オールインクルーシブ」の視点を忘れず、一つ一つの活動の中で、つまずきやすいところを支援できるよう工夫する。
- ・全ての生徒が学びやすいユニバーサルデザインの授業づくりができるとういと思う。

図18 派遣研究協議会の振り返りの記述より(一部)(下線は筆者)

校内の教員が実践を共有し合う中で、生徒一人一人の様子を丁寧に見取り、必要な支援を行うことの大切さを改めて認識できた。また、協議会を通して、教員同士が特別支援教育の視点を共通の意識として学び合う中で、「共に学ぶ」視点に立った授業づくりを進めていこうとする雰囲気校内に少しずつ広がっていったと考えられる。

